

戦後日本の中国近現代思想研究の 歴史に関する資料的考察

小野寺 史 郎

はじめに	277
I 戦前の近現代中国研究	278
II 戦後のアカデミズムの再編と中国近現代思想研究の開始：1945～1950年代	281
III 中国近現代思想研究の展開：1960年代～1970年代前半	293
IV 中国近現代思想研究の転換：1970年代後半～	302
おわりに	308

はじめに

筆者はさきに、戦後日本の中国近現代史研究の歴史を概観する作業を行った⁽¹⁾。ただその際、筆者の能力や紙幅の限界から、隣接する近現代中国の思想や文学に関する研究については断片的にしか言及することができなかった。

ただこれには、中国の近現代史に関する研究や現状分析の分野で定期的に研究史整理が行われており、また中国現代文学研究の歴史を概観した文章もあるのに対し、日本における中国近現代思想研究の歴史をまとめた文章があまり見られないという理由もあった⁽²⁾。

そこで本稿では、今後の研究のための準備作業として、研究会誌や当事者の回想を中心に、このテーマに関する基礎資料の整理と検討を行う。合わせて、戦後日本の中国近現代思想研究の歴史を大枠で捉えるために、どのような視角が可能でありまた有効であるかについても初歩的な検討を加えたい。

なお、日本では近現代中国の思想に関する研究と文学や歴史に関する研究には人的、内

容的に重複する部分が多いため、本稿はその重複部分を中心に文学研究や歴史研究にも言及する。そのため、前著の内容と重複する部分が生じることについてはあらかじめ述べておく。また1990年代以降は、現実の中国をとりまく環境が大きく変化し、研究も細分化、専門化する。そのため本稿では全体的な流れを追うことが可能な1980年代までをさしあたり扱うこととする。

なお「近現代中国」をどのように定義するかはそれ自体極めて大きな問題だが、本稿では大まかに清末以降を指してこの語を用いることとする。また、本文中での人物の所属や肩書は基本的にその時点でのものである。

I 戦前の近現代中国研究

明治から戦前にかけての日本の中国学の展開については先行研究が数多く存在する。通史的なものだけでも、倉石武四郎⁽³⁾、戸川芳郎⁽⁴⁾、坂出祥伸⁽⁵⁾、陳瑋芬⁽⁶⁾、中見立夫⁽⁷⁾、水野博太⁽⁸⁾らの研究が挙げられる。

1877年に成立した東京大学は法学部、理学部、文学部、医学部の四学部を置き、文学部は第一科（史学哲学及政治学科）と第二科（和漢文学科）からなった。このように日本の近代アカデミズムの中には成立当初から「漢学」が含まれていた。そこには洋学と漢学の両立、儒教的な道德教育への再注目という背景があったことが指摘される⁽⁹⁾。ただそこで重視されたのはあくまで古典の教養であり、同時代の中国がアカデミズムの対象となることは少なかった。そのため日本で近現代中国に関する研究が本格的になるのは敗戦以降である。しかし、戦前にもその淵源となる研究は徐々に始められていた。

日本で1920年代という比較的早い時期に同時代の中国の思想や文学の紹介と検討を行った学術団体に支那学社がある。これは京都帝国大学（1897年成立）文学部の小島祐馬（1881-1966）、本田成之（1882-1945）、青木正児らが結成したもので、会誌『支那学』（第1巻第1号～第12巻第5号、1920年9月～1947年8月）を発行した。特に初期には、同時代の中国の社会や大衆文化に着目し、欧米の中国学や、中国の学術動向に関する紹介などにも大きく誌面を割いていた点に同誌の新しさがあった（表1）。

戦前の同時代中国への着目としては、1930年代の文学分野における魯迅の紹介も挙げられる。

日本における初期の魯迅紹介の事例として知られるのは、作家佐藤春夫（1892-1964）が雑誌『中央公論』1932年新年特輯号に魯迅「故郷」の翻訳を掲載したものである。さらに佐藤の弟子だった増田渉（1903-1977、東京帝国大学文学部支那文学科卒業）が『改造』同

表1 初期『支那学』における同時代中国・欧米の学術動向紹介記事

青木正児	胡適を中心に渦いてゐる文学革命	第1巻第1-3号	1920年9-11月
矢野仁一	支那に於ける西洋学	第1巻第3-4号	1920年11-12月
内藤虎次郎	章実斎〔学誠〕先生年譜	第1巻第3-4号	1920年11-12月
小島祐馬	章炳麟の「非黄」を読む	第1巻第3号	1920年11月
石浜純太郎	カルルグレン氏原支那語考	第1巻第6-7号	1921年2-3月
青木正児	新式標点「儒林外史」を読む	第1巻第7号	1921年3月
石浜純太郎	王蘊山氏注音字母論——王蘊山演稿「注音字母与漢字」中華教育界第十卷第八期国語研究号民国十年二月	第1巻第8号	1921年4月
桑原隲蔵	コルヂエ氏の新著『マルコ・ポーロ』を読む	第1巻第9号	1921年5月
石浜純太郎	沈兼士氏文字学研究法	第1巻第10号	1921年6月
青木正児	胡適著「紅樓夢考証」を読む	第1巻第11号	1921年7月
小島祐馬	儒家と革命思想	第2巻第3-4号	1921年11-12月
迷陽山人〔青木正児〕	呉虞の儒教破壊論	第2巻第3号	1921年11月
石浜純太郎	ファリスト氏「トカラ人問題の現状」	第2巻第5号	1922年1月
石浜純太郎	ペリオ氏吐谷渾蘇昆考	第2巻第7号	1922年3月
内藤虎次郎	胡適之君の新著章実斎年譜を読む	第2巻第9号	1922年5月
岡崎文夫	梁漱溟著「東西文化及其哲学」	第2巻第9号	1922年5月
桑原隲蔵	梁啓超氏の『中国歴史研究法』を読む	第2巻第12号	1922年8月
鬮盒〔神田喜一郎〕	支那学界の近況	第2巻第12号	1922年8月

年4月号に「魯迅伝」を掲載した。1935年6月には、岩波文庫から佐藤春夫、増田渉訳『魯迅選集』が刊行されている。

戦前に同時代の中国文学を日本に紹介したことで知られるのが中国文学研究会である。同会はやはり東京帝国大学文学部支那文学科卒業の竹内好（1910-1977）、岡崎俊夫（1909-1959）、武田泰淳（1912-1976）らが1934年に組織したもので、会員には増田渉、松枝茂夫、実藤恵秀、千田九一、飯塚朗、小野忍、斎藤秋男らがいた。会誌『中国文学月報』（第1号～第92号、1935年3月～1943年3月。後、『中国文学』と改題）や『支那現代文学叢刊』『現代支那文学全集』『中国文学叢書』を刊行した。周作人、郭沫若、郁達夫ら、来日した中国の著名作家や中国人留学生と交流を持ったことでも知られる⁽¹⁰⁾。

1936年4月から1937年8月にかけては、改造社から井上紅梅、松枝茂夫、山上正義、増田渉、佐藤春夫、鹿地亘、日高青磨、小田嶽夫の訳になる『大魯迅全集』全7巻が刊行された。こうした魯迅紹介の背景には、この時期の「支那趣味」ブームも影響していたと

考えられる。

日中戦争が本格化した後も、同時代の中国文化の紹介は続いた。文学の分野では、小田嶽夫『魯迅伝』（1941年）や、戦後の研究に大きな影響を及ぼす竹内好『魯迅』（1944年）が刊行されている⁽¹¹⁾。このように、戦前の魯迅受容は直接的に戦後の中国現代文学研究へとつながっていく。

歴史学の分野では、矢野仁一（京都帝国大学文学部）の外交史研究、及川恒忠（慶應義塾大学法学部）の近代中国法制・経済研究、植田捷雄（東京帝国大学東洋文化研究所）の租界研究、鈴江言一（満鉄調査部）の『中国無産階級運動史』（1929年）、『支那革命の階級対立』（1930年）、『孫文伝』（1931年）が知られ、他にも満鉄調査部などで同時代中国の調査研究が行われていた。前著で見たように、戦後初期には戦前の歴史学に対して強い否定的評価がなされたが、一方で慶應義塾大学法学部で及川の中国政治経済に関する研究が継承され、マルクス主義に立つ鈴江の著書が戦後に再刊行されるなど、戦前の研究が後に及ぼした影響も少なくない。

思想研究の分野では、中央公論社の藤原定『近代支那思想』（1941年）や、光風館「近代支那文化読本」シリーズの実藤恵秀編輯『近代支那思想』（1942年）、和田清編輯『近代支那文化』『近代支那社会』（いずれも1943年）が近代以来の中国思想の通史的な紹介を行っている⁽¹²⁾。また、この時期に発表された中国近現代思想研究のまとまった成果として、神谷正男（1910-1972）の論著が挙げられる。神谷は郭湛波『現代支那思想史』や、蔡尚志・郭湛波らの論考をまとめた『現代支那思想の諸問題』（いずれも1940年）を翻訳刊行した他、1938-1941年に発表した論文をまとめて『現代支那思想研究』（1941年）として出版している。神谷は東京帝国大学文学部支那哲学支那文学科の高田真治の下で学び、1935年から3年間北京に留学、帰国後は日本文化中央連盟や大東亜省に勤めた⁽¹³⁾。神谷が当時の日本に広くあった「変化のない中国」という見方に反して「現代支那思潮における儒教主義的潮流の地位は決して高くない。といふより、むしろもつとも低いといふ表現が適切であるかも知れない。ことに現代の支那文化界を担当してゐる主体である知識階級の伝統主義的思想に対する態度は、消極的にこれを支持しないといふより、むしろ積極的に反対し、排斥する傾向にあるといふことができる」「民族主義的方向は必然的に「伝統への結合」を来すことにはなるであらう。しかしながら、それは決して無批判、無変更なる古きもの、封建的なものの再現ではなくて、問題の立て方、解決の方法には自から今日的意義が含まれてゐる。それ故に今日においては、封建的軍閥の政治的勢力の下に唱へられる儒教復活や読経運動はいふまでもなく、梁啓超、梁漱溟式な素朴な東方文化論などでは満足されないのである」⁽¹⁴⁾ というように、同時代の中国思想の反伝統の側面を強

調していた点は特徴的である。しかし、戦後の神谷は中国の古代思想や太宰春台の作とされてきた『産語』の研究に転じたため、こうした問題提起が十分に展開されるには至らなかった。

II 戦後のアカデミズムの再編と中国近現代思想研究の開始： 1945～1950年代

以下ではまず、東京大学と京都大学を中心に、戦後日本のアカデミズムにおける中国研究の再編と、その中における近現代中国研究の位置づけ、そして中国近現代思想研究の初期の展開について概観する。あつかう範囲がごく限られているのは、あくまで筆者の能力と紙幅の限界によるものであり、ここで触れた以外の研究機関や学会でそれぞれ特色ある重要な近現代中国研究が展開されていたことは言うまでもない。この点はあらためて申し述べておく。

1 東京大学の中国研究の再編と初期の近現代中国研究

敗戦後の1947年にそれまでの帝国大学の名称が変更され、1949年に新制大学が発足した（一部私大は1948年から）。

東京大学文学部の東洋史学科では、1948年に榎一雄が、1949年に西嶋定生が着任し、1951年に和田清が定年退職して世代交代が進んだ（表2-2）。

相対的に政治と距離があった東洋史学科と比較し、戦前に国民道徳という問題に関わった中国哲学科（1948年にそれまでの「支那哲学」から名称を変更）では、唯一の専任教授だった高田真治が1948年に公職追放となった。そのため中国哲学科はその後、1947年に着任した加藤常賢と、1951年に着任した宇野精一が長く担当することになった（表2-1）。

1949年には旧制一高から移行する形で教養学部も発足し、人文科学科、外国語科、社会科学科、自然科学科、体育科が置かれた。人文科学科には歴史学研究室、国文学・漢文学研究室、外国語科には中国語研究室があり、中国研究関係では、歴史学研究室に三上次男、国文学・漢文学研究室に阿部吉雄、市川安司、中国語研究室に工藤篁が着任した。また、1957年に社会科学科に国際関係論教室が新設されると衛藤藩吉が着任した⁽¹⁵⁾（表2-4、2-5、2-6、2-7）。

戦前の中国文学研究会の影響から、文学分野では比較的早い段階から現代を対象とした研究も重視されたのに対し（表2-3）、歴史や思想の分野で近現代中国の専任教員が置かれるのは1970年代以降になる。

表2-1 戦後の東京大学文学部中国哲学科（講師、助手等は除く。以下同じ）⁽¹⁶⁾

名前	生没年	在任年	専門分野	備考
高田真治	1893-1975	1928-1948	儒家思想	京城帝国大学法文学部より着任。公職追放
加藤常賢	1894-1978	1947-1955	中国古代文化	広島文理科大学より着任
宇野精一	1910-2008	1949-1971	儒家思想	哲人の子。東京高等師範学校より着任
赤塚忠	1913-1983	1955-1974	中国哲学史、中国古代史	神戸大学文理学部より着任
山井湧	1920-1990	1964-1981	中国近世思想史	
友枝龍太郎	1916-1986	1971-1973	中国近世思想	広島大学文学部と併任
戸川芳郎	1931-	1972-1992	中国古典学	お茶の水女子大学文教育学部より着任
福永光司	1918-2001	1974-1979	中国哲学史	京都大学人文科学研究所より着任、同所に帰任
池田知久	1942-	1980-2003	中国思想史	岐阜大学教育学部より着任
溝口雄三	1932-2010	1981-1993	中国思想史	一橋大学社会学部より着任

表2-2 戦後の東京大学文学部東洋史学科⁽¹⁷⁾

和田清	1890-1963	1927-1951	北アジア史	
山本達郎	1910-2001	1944-1971	東南アジア史	東洋文化研究所と兼任
榎一雄	1913-1989	1948-1974	中国史、中央アジア史	
西嶋定生	1919-1998	1949-1980	中国古代史	
護雅夫	1921-1996	1956-1981	北アジア史、中央アジア史	北海道大学法文学部より着任
周藤吉之	1907-1990	1957-1967	中国近世史	東洋文化研究所より配置換え
田中正俊	1922-2002	1967-1983	中国近代史	横浜市立大学文理学部より着任
永積昭	1929-1987	1971-1987	東南アジア史	東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所より着任。在任中死去
武田幸男	1934-2021	1971-1995	朝鮮前近代史、東アジア交渉史	北海道大学文学部より着任
辛島昇	1933-2015	1974-1994	南アジア史	東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所より着任
佐藤次高	1942-2011	1980-2003	アラブ・イスラーム史	お茶の水女子大学文教育学部より着任
尾形勇	1938-	1983-1998	中国古代史・東アジア史	山梨大学教育学部より着任

1949年には文学部中国哲学科の学生団体だった漢学会（1933年～）が東京支那学会と改称され、会誌『漢学会雑誌』（第1巻第1号～第12巻第1・2号、1933年6月～1944年12月）も『東京支那学会報』（第1号～第14号、1949年7月～1954年5月。後に『東京支那学報』

表2-3 戦後の東京大学文学部中国文学科⁽¹⁸⁾

竹田復	1891-1986	1926-1946	中国語学、中国文学	東京文理科大学に転出
倉石武四郎	1897-1975	1940-1958	中国語学、中国文学	1949年まで京都大学文学部と兼任
松枝茂夫	1905-1995	1947-1948	中国近現代文学	九州大学法文学部より着任。辞任
藤堂明保	1915-1985	1954-1970	中国語学	辞任
小野忍	1906-1980	1955-1967	中国近現代文学	
前野直彬	1920-1998	1958-1981	中国古典文学	東京教育大学文学部より着任
尾上兼英	1927-2017	1968-1969	中国小説史	北海道大学文学部より着任。東洋文化研究所と兼任
高田淳	1925-2010	1972-1974	中国思想	真治の子。東京女子大学文理学部より着任。辞任
丸山昇	1931-2006	1972-1992	中国近現代文学・思想	和光大学人文学部より着任
平山久雄	1932-	1975-1993	中国語音韻史	
伊藤漱平	1925-2009	1977-1986	中国文学	北海道大学文学部より着任

表2-4 戦後の東京大学教養学部人文科学科歴史学研究室（中国関係教員のみ）⁽¹⁹⁾

三上次男	1907-1987	1949-1967	東洋史、東洋考古学	
岸辺成雄	1912-2005	1949-1973	日本・東洋音楽史	
上原淳道	1921-1999	1953-1982	中国古代史、中国現代史	専禄の子
小島晋治	1928-2017	1973-1988	中国近現代史	横浜市立大学文理学部より着任

表2-5 戦後の東京大学教養学部人文科学科国文学・漢文学研究室（中国関係教員のみ）

阿部吉雄	1905-1978	1949-1966	日本儒学	
市川安司	1910-1997	1949-1971	朱子学	
小野沢精一	1919-1981	1966-1980	中国古代思想史	
竹田晃	1930-	1965-1991	中国古典小説史	復の子
丸山松幸	1934-	1971-1995	中国近代思想史	関西大学文学部より着任
小川晴久	1941-	1980-2001	東アジア思想史	東京女子大学文理学部より着任

表2-6 戦後の東京大学教養学部外国語科中国語研究室

工藤篁	1913-1974	1950-1974	中国語教育法	一橋大学社会学部より着任
伊藤敬一	1927-2017	1970-1987	中国近現代文学	東京都立大学人文学部より着任
伝田章	1933-	1974-1994	中国語学、中国文学	東京都立大学人文学部より着任
高橋満	1939-	1979-2000	現代中国経済	農林水産省農業総合研究所より着任
若林正文	1949-	1986-2010	台湾近現代史、現代台湾政治論	早稲田大学政治経済学術院に転出

表2-7 戦後の東京大学教養学部社会科学科国際関係論研究室（中国関係教員のみ）

衛藤藩吉	1923-2007	1956-1984	極東国際政治史、近代日中関係史	東京工業大学理工学部より着任
平野健一郎	1937-	1970-1998	アジア近代史、日中関係史	
石井明	1945-	1977-2007	中ソ関係史	

と改称、第1号～第16号、1955年6月～1971年6月）となった⁽²⁰⁾。ただ、清末以降を扱った倉石武四郎、佐藤震二、後藤基巳などの論文も見えるものの、やはり基本的には近代以前の歴史、文学、思想に関する研究が引き続き誌面の大半を占めた。

この点は、全国学会として1946年に創設された財団法人東方学術協会（1947年に東方学会と改称。羽田亨会長、宇野哲人理事長）と会誌『東方学』（第1輯～、1951年3月～）、1949年に創設された日本中国学会（加藤常賢理事長）と会誌『日本中国学会報』（第1号～、1950年3月～）なども同じだった。

やや例外的だったのは、1948年に東方文化学院を吸収して改組された東京大学東洋文化研究所で、比較的早い段階から同時代の中国を扱った研究が始められた。東アジア第一部門（経済、社会、政治、歴史、考古）で、戦前から中国法制史を研究してきた仁井田陞（1942-1964年在任）を中心に、松本善海（1949-1971年在任）、福島正夫（1952-1967年在任）、衛藤藩吉、古島和雄、花村芳樹、小堀巖らが参加して1954年に始められた現代中国研究班がそれで、土地改革への検討から、中国の社会主義建設の性格を分析しようとしたものだった。当初の政治、法律、経済といった分野の分析から、後には文学や芸術の問題にも研究の範囲を拡大し、佐伯有一、本橋渥、竹内実、米沢嘉圃、尾上兼英、新島淳良らが加わっている（責任者は福島）。研究の内容は所誌『東洋文化』第27号（1959年3月）の「人民公社特集」や『東洋文化研究所紀要』第21冊（1960年3月）所載の論文として発表された⁽²¹⁾。

東京大学で文学部・教養学部・東洋文化研究所以外で近代中国を扱った研究者としては、社会科学研究所で同時代中国を研究した高橋勇治（1947-1969年在任）、近代中国の農村社会を研究した古島和雄（1954-1982年在任）、中国近代思想を研究した近藤邦康（1974-1995年在任）らが挙げられる⁽²²⁾。また法学部でも滋賀秀三（1948-1982年在任）が東洋法制史を、坂野正高（1962-1976年在任）がアジア政治外交史を講じていた。

この他、既存のアカデミズムの外で創設された近現代中国の研究機関に中国研究所がある（1946年成立）。平野義太郎が初代所長、石浜知行、伊藤武雄、岩村三千夫、幼方直吉、尾崎庄太郎、小野忍、鹿地亘、具島兼三郎、実藤恵秀、野原四郎らが理事となり、他に創

立時の主要メンバーに堀江邑一、浅川謙次、安藤彦太郎らがいた。所誌として『中国資料月報』（第1号～第4号、1946年11月～1947年2月。『中国研究所所報』第1号～第22号、1947年3月～1949年8月。『中国資料月報』第23号～第145号、1949年10月～1960年3月。『中国研究月報』第146号～、1960年4月～）、『中国評論』（第1巻第1号～第2巻第2号、1946年6月～1947年2月。『中国研究』第1号～第16号、1947年6月～1952年9月。第14号より現代中国学会発行）などを刊行した。

東大新人会（石浜、伊藤）、プロレタリア科学研究所支那問題研究会（岩村、尾崎、協力者の中西功）、プロレタリア文学運動（鹿地）など、戦前に社会運動や共産主義活動に参加していた人物が含まれ、日本共産党の党员やシンパも多かった。ただ中国研究所には、マルクス主義者に限らず、より幅広い戦前からの研究者も加わっていた。たとえば中国文学研究会からは小野、実藤が中国研究所の理事となっている。増田渉、武田泰淳、竹内好らも研究所には参加しなかったが、所誌に寄稿を行っていた⁽²³⁾。

2 京都大学の中国研究の再編と中国近現代思想研究の開始

京都大学では1947年に支那語学支那文学講座（1950年に中国語学中国文学講座に改称）の青木正児が定年退職し、吉川幸次郎が後任となった。また、倉石武四郎が1949年に東京大学の専任となって転出した後、東北大学から小川環樹が着任して後任となった⁽²⁴⁾（表3-1、3-2、3-3）。

1947年に支那哲学史研究会が組織され（代表者は重沢俊郎。後、中国哲学史研究会と改称）、『東洋文化の問題』（第1号、1949年6月）、『東洋の文化と社会』（後、『中国の文化と社会』と改題。第1輯～第13輯、1950年11月～1968年11月。大学紛争の影響により停刊）を刊行した。同誌の「序」には次のようにある。

近来、中国の新しい政治的展開を敏感に反映した著書や論文が続出するのは、一見喜ぶべきことのやうであるが、仔細にその内容を検討するならば、或は公式主義の弊に陥り、或は主義宣伝を事とするものも少くはない。現実への関心が必要なことは勿論ではあるが、一たび実証の立場を離れ、批判的精神を没却するならば、これまた曲学阿世の譏りを免れ難いであらう。

……吾人は飽くまでも実証主義の上に立ち、批判的精神を堅持せんとするものである。なぜならば、この精神の缺如こそ、過去における支那学の正常な発達を妨げてきた最大の障害であつたと信ずるからである。……しかもその歴史的研究なるものも、従来の如き狭隘固陋なる研究分野に踟躕し、相互の有機的連関を無視する孤立的研究

であつてはならぬ。かくて吾人の目指す所は、実証主義に基底を置き、普遍と総合とを求める歴史的研究である⁽²⁵⁾。

重沢がやはりマルクス主義の影響を受けていたことにもよるものか、戦前の研究への批判がかなり明確に述べられており、それを乗り越える方法として、実証主義と、その一方での専門領域への没入に対する注意が掲げられている。

同じ1947年には前述の支那学社の『支那学』が停刊し、後継の『東光』(第1号～第9号、1947年8月～1949年。最終号の発行月は不明)が刊行されている。こちらの「巻頭言」はさらに明確に、中国史や中国文化の見直しを提起している。

不可解なものとしてシナを見ることは近代の常識であつた。近代人の眼鏡には焦点が合いかねたのである。……周王朝以来、三千年のシナのあり方は、この近代の諸形式からお、よそかけ離れた性質のものであつた。それは、一般の近代人にとつて、ピントが合いにくいだけでなく、骨折つて合わせる必要を感じさせないものでもあつた。しかし二度の大戦は近代の極限を示した。古代、中世、近代について、いまや人間の歴史の第四の時代が始まろうとしている。矛盾と対立、克服と創造の時代に代つて、調和と統一、安分と享受の生活を根本義とする時代が始まろうとしている。

……謎とされたシナの非近代性は、実は高次の世界の図式を秘めた超近代的性格のものではなかつたか。我らはこれまでの眼鏡をはずして、新しい世界を展望する。その目をもつて、改めてシナ文化の意味する所を、始めてそれを見る人の如くに、見直そうとするものである。……

我らのシナ学は、基本的には、中国一国の学問ではなく、世界の歴史の学問である。……シナ学徒は、シナ文化が文字その他の事情から多種の文化より余りに隔絶しているので、それを一般文化の基盤の上にもち来たす所に、その特殊性を持つ。これは、事業・環境のいずれよりいうも、極めて困難な任務である。ほとんど他を顧みる余地がないのは事実である。しかしシナ学徒は、それを更に世界文化の図式にまで高める職責を忘れてはならない⁽²⁶⁾。

中国の「非近代性」はすなわち「超近代」であるという論理は、後述する竹内好の「反近代の近代」という中国観にも通じるものがある。ただここでは、中国を特殊視するのではなく、世界史の中で捉えるという視点がより重視されているように見える。

新制大学発足に伴い、旧制三高から改組された京都大学分校(後、教養部と改称)には、

中国語担当として田中謙二、清水茂、尾崎雄二郎が、歴史学担当として羽田明、西田太一郎が着任した⁽²⁷⁾ (表3-4、3-5、3-6)。

やや下って1954年には、京都大学文学部中国語学中国文学研究室が『中国文学報』（第1冊～、1954年10月～）を創刊している。基本的には古典文学を扱うものの、現代中国文学、同時代の中華人民共和国における胡風批判や双百運動、研究動向の紹介といった記事も見える。

とは言え、京都大学でも基本的には学部には近現代中国を専門とする教員は長く不在だった(例外は教養部の堀川哲男)。このため近現代中国に関する研究はやはり主に研究所などで展開されていった。

1949年に京都大学人文科学研究所・東方文化研究所・西洋文化研究所が統合され、新たな京都大学人文科学研究所が成立した。人文科学研究所の島田虔次は、戦中の論文を元にとまとめた『中国に於ける近代思惟の挫折』（1949年）で、内藤湖南の宋近世（近代）説を前提に、宋から明にかけて、儒学の内部に合理主義、欲望の積極的肯定、「個人」の析出

表3-1 戦後の京都大学文学部中国哲学史講座⁽²⁸⁾

重沢俊郎	1906-1990	1942-1970	中国哲学史	
湯浅幸孫	1917-2003	1961-1981	中国思想史	廉孫の子。山口大学文理学部より着任
日原利国	1927-1984	1983-1984	中国古代・中世思想史	大阪大学文学部より着任。在任中死去
池田秀三	1948-	1980-2013	中国哲学史	
内山俊彦	1933-2020	1988-1997	中国思想史	山口大学人文学部より着任

表3-2 戦後の京都大学文学部東洋史学講座⁽²⁹⁾

那波利貞	1890-1970	1929-1953	唐代社会文化史	
宮崎市定	1901-1995	1934-1965	中国の社会、経済、制度史	
田村実造	1904-1999	1940-1968	北アジア史	
宇都宮清吉	1905-1998	1947-1948	中国古代・中世史	名古屋大学文学部に転出
佐伯富	1910-2006	1949-1974	中国近世社会経済史	山口経済専門学校より着任
佐藤長	1913-2008	1954-1978	チベット史	神戸大学文理学部より着任
萩原淳平	1920-2000	1962-1984	北アジア史	
竺沙雅章	1930-2015	1968-1993	中国近世史	人文科学研究所より配置換え
島田虔次	1917-2000	1975-1981	中国思想史	人文科学研究所より配置換え
谷川道雄	1925-2013	1978-1989	中国史	名古屋大学文学部より着任
河内良弘	1928-	1985-1992	満洲語研究	天理大学おやさと研究所より着任

表3-3 戦後の京都大学文学部中国語学中国文学講座⁽³⁰⁾

倉石武四郎	1897-1975	1927-1949	中国語学、中国文学	東京大学文学部の専任に
青木正見	1887-1964	1938-1947	中国文学	東北帝国大学法文学部より着任
吉川幸次郎	1904-1980	1947-1967	中国文学	東方文化研究所より着任
小川環樹	1910-1993	1950-1974	中国文学	琢治の子。東北大学文学部より着任
清水茂	1925-2008	1959-1989	中国語学、中国文学	教養部より配置換え
高橋和巳	1931-1971	1967-1970	中国文学	辞任
入矢義高	1910-1998	1970-1974	中国古典文学、中国禅宗史	名古屋大学文学部より着任
興膳宏	1936-2023	1974-2000	六朝文学	名古屋大学教養部より着任
小南一郎	1942-	1976-1984	中国古代文学	人文科学研究所に配置換え
川合康三	1948-	1987-2012	中国語学、中国文学	東北大学文学部より着任
平田昌司	1955-	1989-2020	中国語学	山口大学人文学部より着任

表3-4 戦後の京都大学教養部歴史学担当（中国関係教員のみ）⁽³¹⁾

羽田明	1910-1989	1949-1970	中央アジア史、西南アジア史	亨の子。文学部に配置換え
吉川忠夫	1937-	1969-1974	中国史	幸次郎の子。人文科学研究所に配置換え
堀川哲男	1936-1990	1970-1990	中国近代史	岐阜大学教育学部より着任。在任中死去
愛宕元	1943-2012	1977-2007	中国中世・近世史	松男の子

表3-5 戦後の京都大学教養部社会思想史担当（中国関係教員のみ）

西田太一郎	1910-1982	1950-1974	中国思想史	
西脇常記	1943-	1981-2006	中国思想史	新潟大学教養部より着任

表3-6 戦後の京都大学教養部中国語担当

田中謙二	1912-2002	1951-1956	中国文学	人文科学研究所に配置換え
清水茂	1925-2008	1958-1959	中国語学、中国文学	文学部に配置換え
尾崎雄二郎	1926-2006	1960-1975	中国語音韻史	人文科学研究所に配置換え
都留春雄	1926-	1976-1989	中国文学	滋賀大学教育学部より着任
高田時雄	1949-	1983-1989	中国語史	人文科学研究所に配置換え

といった近代的要素が生じたが、士大夫は既存の社会に対立する新興階級ではなく、庶民もまた新興階級とはならなかったがゆえに、ヨーロッパのような市民社会には到達しなかったとした。前提となっているのはウェーバーの議論で、島田によれば「中国近世の庶民が『無文樸茂』こそ人間のまさにあるべきあり方と自覚して、詩酒官場を徹底的に憎悪し、教養を徹底的に否定した、sobreな生活原理に立つこと西欧プロテスタントの如くでなかつたところに、大にしては中国が畢竟して停滞の国たらざるを得なかつた所以があり、……神を知らざる精神、否定の論理なき民族——そのやうな地盤に咲いた近世は、ヨーロッパ近世を尺度にとるときは、つひに開花しつくさざる近世と言はるべきであつた〔傍点は原文〕」。島田は以上の考察の目的を次のように述べている。

等しく人間生活の展開である限り、ヨーロッパたと中国たとを問はず、そこには畢竟して同じやうな傾向が現れるであらうし、学問が人間理知の認識であるかぎり、それが法則的類型的なものを取り上げることは事柄の自然に属するであらう。中国の近世といへども人間史の『近世』に例外ではあり得ないと信ぜらるるのである。然も同時に我我はまた、そのあくまで中国的な性格を追求しなければならない。中国の近世性と近世の中国性——この両面を精確に認識せんが為めに近代中国史の主体たる士大夫の存在性格を把握すること、これ本書の中心課題をなすものに他ならぬ⁽³²⁾。

ここで中心的な課題となったのは、普遍的な法則（＝ヨーロッパ）と、中国の特殊性をどのように整合するかだった。

また、すでに退職していたものの、前述したように、戦前から章炳麟や譚嗣同の思想を紹介していた小島祐馬は、『中国の革命思想』（1950年）で、孫文の三民主義に至る「現代中国の革命運動が斯様に西欧近代のそのの影響であるにしても、その背後に横はる三千年来の革命的伝統は軽視できない。またかかる伝統から理解するといふ態度を一面にもたないかぎり、中国革命の中国的なる特質を見極めることは出来ないであらう」とし、中国の革命思想を儒家・道家以来の革命の伝統との関係で理解する必要性を主張した⁽³³⁾。中国の近代とヨーロッパの関係が問題となった一方、それを中国の伝統社会や思想との関係でどのように捉えるかも、戦後日本の中国近現代思想研究にとって非常に大きな論点となった。

3 竹内好と日本の中国近現代思想・文学研究

中国の近代の見方をめぐって、敗戦直後に、戦前以来の東洋学と、マルクス主義に基づく中国研究のどちらとも異なる立場を表明したのが竹内好だった。竹内は1948年に発表し

た「中国の近代と日本の近代」で、近代を困難の克服による自己実現の運動と定義し、ヨーロッパの侵入と東洋（＝中国＝魯迅）の抵抗とともに近代の契機とみなす一方、そうした困難に抵抗する過程を経なかったとして明治以来の日本を強く批判した。

東洋は抵抗を持続することによつて、ヨオロッパ的なものに媒介されながら、それを越えた非ヨオロッパ的なものを生み出しつつあるように見える。

……抵抗を通じて、東洋は自己を近代化した。抵抗の歴史は近代化の歴史であり、抵抗をへない近代化の道はなかつた。

……抵抗がないのは、日本が東洋的でないことであり、同時に自己保持の欲求がない（自己がない）ことは、日本がヨオロッパ的でないことである。つまり日本は何物でもない⁽³⁴⁾。

本論文およびそれを収録した竹内の『現代中国論』（1951年）は、以後の日本の中国研究に多大な影響を及ぼした。戦後日本の思想が強い西洋志向の近代主義に傾く中、竹内の議論は、近代という価値と、東洋による西洋への抵抗という要素を両立させる論理をもたらした。

なお、戦前の中国文学研究会の同人だった岡崎俊夫と千田九一が中心となって戦後に『中国文学』の発行を再開していたが（第93号～第105号、1946年3月～1948年4月）、出征先の中国から引き揚げてきた竹内好がこれを認めず、短期間で停刊に至った。とは言え戦後も東京大学の中国文学科では中国文学研究会の松枝茂夫や小野忍が教員を務めた他（表2-3）、竹内好、岡崎俊夫、増田渉らも講師として招かれており、その学問的影響が指摘される⁽³⁵⁾。

その東京大学文学部中国文学科の学生を中心に1952年に組織されたのが魯迅研究会である。尾上兼英が中心となり、高田淳、松本昭、新島淳良、宇佐美直規、丸山昇、津田孝、竹田晃、宅見晴海、戸川芳郎、伝田章、平山久雄、近藤邦康、佐藤保、木山英雄、山之内正彦などが参加し、会誌『魯迅研究』（第1号～第35号、1953年1月～1966年5月）を発行した。彼らは前述の教養学部の工藤篁や、一橋大学から非常勤講師として出講していた西順蔵からも影響を受けたと言われる⁽³⁶⁾。

ただ、その1952年に、皇居前広場でデモ隊と警官隊が衝突するメーデー事件が起き、デモに参加していた丸山昇が逮捕されたり⁽³⁷⁾、日本共産党の山村工作隊に参加した戸川芳郎が検挙されたりと⁽³⁸⁾、急進的な学生とそれ以外の学生の間にも距離も生じた。そのため同会は早い段階で、政治的色彩の強い第一分科会（丸山昇ら）と、それに反発した第二分科会

(高田淳、新島淳良ら) とに分裂している⁽³⁹⁾。

彼ら東京の研究者たちの手になる比較的早い時期の中国近現代思想の通史が、竹内好、山口一郎、斎藤秋男、野原四郎の共著『中国革命の思想——アヘン戦争から新中国まで』(1953年)である。同書は基本的に毛沢東の「新民主主義論」(1940年)や范文瀾『中国近代史』(1947年)を下敷き、「日本の革命の主力である労働者が、それを血肉にすることのできる学問を志そう」という目的の下で書かれたものである。ただ「まえがき」で「今日の中国にそだちつつある文化は、これまでの歴史にあらわれた文化とどうちがうのか、そこに形成されつつある人間は、史上のあらゆる人間類型とどうちがうのか」という「中国における近代の異質性の究明」を最初から重視していた点は特徴と言える⁽⁴⁰⁾。同書執筆者を中心として1956年に中国近代思想史研究会が組織された。初期の参加者は他に野沢豊、新島淳良、折下功、実藤遠(恵秀の子)、野村浩一、高田淳、西順蔵、丸山松幸、近藤邦康、渡辺恵子、山本秀夫、伊東昭雄、衛藤藩吉、丸山昇、木村郁二郎、大村益夫らである⁽⁴¹⁾。会誌『中国近代思想史研究会会報』(第1号～第51号、1959年10月～1968年10月)の創刊に際し、竹内好は次のように述べている。

この会は、第一に、中国と日本を相関的に考えていく方向を取りたい。日本の近代史を解くのに西欧との対比だけでは不十分なので、どうしても朝鮮なり中国なりインドなり、つまりアジアという座標軸を一本加えないとうまくいかない。とくに思想史の場合はそうである。なぜならば、思想史というものは、私の定義では、歴史を可能性で考える学問だからである。……第二に、実証的な個別研究を強化して、その立ちおくれを早く克服しなければならない。……第三に、それと矛盾するようだが、個別研究に深入りして、ミイラ取りがミイラになることを警めたい⁽⁴²⁾。

彼らはこれに先立つ『思想』第396号(1957年6月)に特集「孫文と日本」を掲載していたが(執筆者は竹内好、野村浩一、野原四郎、野沢豊、新島淳良、安藤彦太郎)、そこでも「共同研究の過程で、私は自分が以前から立てている仮説を主張する立場を守った。その仮説というのは、日本の近代化の当初においては、アジア的連帯へ向かう可能性があったかもしれないが、その可能性は早くからチェックされ、明治三十年代、つまり日清戦争から日露戦争にかけて漸次消滅した、というのである。……私は今日、日本がアジアの連帯を回復することを希望し、そのための条件を「理論的に」作り出したいと念願している」と述べていた⁽⁴³⁾。こうした問題意識は、以後の竹内のアジア主義再評価へとつながっていくこととなる⁽⁴⁴⁾。

この時期には現代中国文学の作品の紹介も進んだ。1954年から1958年にかけては『現代中国文学全集』全15巻（河出書房）が刊行された。魯迅の他、郭沫若、茅盾、老舍、巴金、沈從文、丁玲、趙樹理、黄谷柳、曹禺などの作品が採録され、訳者は竹内好、松枝茂夫、小野田耕三郎、須田禎一、奥野信太郎、小川環樹、松井博光、鈴木沢郎、魚返善雄、実藤恵秀、桑島信一、岡崎俊夫、寫静子、千田九一、立間祥介、岡本隆三、小野忍、島田政雄、佐藤一郎、吉田幸夫、倉石武四郎、阿部幸夫、増田渉、小田嶽夫らだった。1955年には竹内好、岡崎俊夫監修、中国文学研究会編『中国新文学事典』（河出書房）も刊行された。戦前から企画されていたもので、執筆者は他に檜山久雄、飯塚朗、小野忍、斎藤秋男、実藤恵秀、松枝茂夫、阿部幸夫、伊藤敬一、今村与志雄、宇田礼、小野田耕三郎、君島久子、佐藤一郎、高島穰、立間祥介、長南芳樹、藤田祐賢、村松暎、小川博で、『現代中国文学全集』訳者と重複も多い。1956年には増田渉、松枝茂夫、竹内好編訳『魯迅選集』全12巻＋論文集『魯迅案内』（岩波書店）も刊行されている。なお、この分野の研究は魯迅（を中心とする「文学革命」以降の作家）の研究として始まったことから、「近代中国文学」ではなく「現代中国文学」という言葉が使われることが多い。これは清末から辛亥革命の研究として始まった「中国近代史」研究との違いと言える。

この他、たとえば1951年には九州大学文学部中国文学研究室で中国文芸座談会が開始され、後に『中国文芸座談会ノート』（第1号～第17号、1954年9月～1968年3月）が刊行されている。目加田誠（1904-1994、東京帝国大学文学部支那文学科卒業）の「創刊によせて」は、「中国現代の文芸を読んで、どうしても他人事ではないものをひし／＼と感じている」、「中国文学の与へるものは、我々にとって正しく今日の問題であり、我々を自棄絶望から救ふ力づけであり、先づ吾々自身を改造させる何者かゝそこにある。我々国民共通の問題を考へさせるものがそこにあるともいえる」と、中国と日本の持つ問題の共通性をまず強調している⁽⁴⁵⁾。

4 1950年代の中国近現代思想研究

ただ当時は、中華人民共和国で文学作品が政治的な批判の対象となっていることも伝わりつつあった。たとえば1951年5月に映画『武訓伝』が階級的視点を欠くと批判され、また1954年10月には俞平伯の『紅樓夢』研究に対する批判が始まり、後に胡適批判に発展している。1957年6月には反右派闘争が始まり、文学者でも丁玲、馮雪峰、艾青らが反党分子として迫害を受けた（前述の1955年に刊行された『現代中国文学全集』第9巻は丁玲篇）。こうした事態は、一部の日本の研究者の間に、近現代中国の捉え方に対する疑問を生じさせることにもなった。

以上のような背景の下、1950年代の中国近現代思想研究は、初歩的ながら、対象・方法の両面で、特定の方向性に限られたものではなく、むしろ相対的に多様であったように見える。前述した以外のこの時期の研究としては、佐藤震二、板野長八、市古宙三らの康有為や梁啓超に関する研究、山本秀夫、波多野善大、永井算巳らの孫文・民生主義に対する検討、野原四郎や高橋勇治の新文化運動論などが挙げられる。

Ⅲ 中国近現代思想研究の展開：

1960年代～1970年代前半

1 小野川秀美と京都大学人文科学研究所中国近代史研究班

以上のような背景の下、中国近代思想の歴史を体系的にまとめた初期の代表的な著作が小野川秀美（1909–1980）の『清末政治思想研究』（1960年）である。

小野川は京都帝国大学文学部史学科を卒業後、東方文化研究所を経て戦後は京都大学人文科学研究所に勤めた。小野川が1950年代に発表した諸論考をまとめた『清末政治思想研究』は、実証主義的な手法に基づき、魏源、馮桂芬、薛福成、王韜、李鴻章、曾紀沢、湯震、陳虬、鄭觀応、陳熾、康有為、譚嗣同、梁啓超、唐才常、嚴復、章炳麟、劉師培らの思想を、清末の歴史の展開の中に位置づけて論じた。また小野川は同書の「序」で清末の政治思想の展開を、近代西洋思想に対する反発と受容の度合いを基準として洋務論・変法論・革命論の三段階に区分する見方を示したが、この三段階論は以後ほぼ通説と見なされるほどの強い影響力を持った⁽⁴⁶⁾。

さらに1957年に中国同盟会機関誌『民報』（1905–1910年）が中国で復刻されると、小野川の下、天野元之助、小野信爾、島田虔次、北村敬直、岩見宏、小野和子らが参加して京都大学人文科学研究所で会読（読書会）が始められた。同会は1966年に正式に人文研の「辛亥革命の研究」研究班（班長は島田虔次、後に小野川秀美）となり、研究発表が活動の中心となった。研究班は1969年の学園紛争の影響による中断をはさみつつ、1973年まで継続された。前述した以外の主な班員には、寺広映雄、河田悌一、森時彦、北山康夫、松本英紀、狭間直樹、副島圓照（昭一）、菅野正、姜在彦、守川正道らがいる。同研究班は『民報』を中心とする中国近代史関連史料を整理、翻訳し、島田虔次『中国革命の先駆者たち』（1965年）、島田虔次、小野信爾編『辛亥革命の思想』（1968年）、小野川秀美編『世界の名著64孫文・毛沢東』（1969年）、小野川秀美編『民報索引』上・下（1972年）などを次々と刊行した⁽⁴⁷⁾。

2 「反近代の近代」

小野川の著作と同じ時期に、主に東京の研究者によって書かれたのが、西順蔵、野原四郎、荒松雄、中岡三益、旗田巍、幼方直吉の編になる『講座近代アジア思想史1中国篇1』（1960年）である。アヘン戦争から国共分裂後の毛沢東による根拠地建設までの思想を扱った通史的な論文集で、執筆者は波多野善大、小島晋治、市古宙三、野村浩一、野原四郎、今村与志雄、山本秀夫、矢沢康祐、尾上兼英、上原淳道、佐伯有一である。

西順蔵（1914–1984）は東京帝国大学文学部支那哲学支那文学科を卒業後、京城帝国大学法文学部を経て戦後は一橋大学社会学部で研究と教育に従事した。宋学がもともとの専門だったが、毛沢東思想、同時代の日中関係やアジアに関する文章も数多く発表している。『講座近代アジア思想史1中国篇1』の巻末に「補論」として置かれた西の論文「中国近代思想のなかの人民概念」は、中国の近代思想における人民概念は「旧き天下の人民の思想と連続している」とし、たとえば孫文の国民主義においても「民族国家の国民とは、本質は天下の人民であるものの歴史条件的形態であり、それは「近代」の衝撃によって中国の内部に生れた「近代」反対物である」とした⁽⁴⁸⁾。ヨーロッパ近代への独特の対抗が中国の近代であるという議論は、前述の竹内好のそれに通じる。また、そこに中国の伝統思想が果たした役割を評価する視点も特徴である。

同じ内容をより精緻に論じたと言えるのが、東京大学法学部で丸山真男に学んだ野村浩一（1930–2020、立教大学法学部）である。野村は「清末公羊学派の形成と康有為学の歴史的意義」（1957–1958年）で、「持続の帝国」の下でも「恭順原理を核とする儒教」は自己分裂を進めていたが、そこから「西洋的な近代化の道」は全く閉ざされていた。そこに決定的な一撃を与えたのが「西洋の衝撃」^{ウエスタン・インパクト}であり、儒教の「西洋思想との激烈なる対抗の中」にのみ、中国の近代思想が生み出されてきたとした⁽⁴⁹⁾。

後に同論文を収録した『近代中国の政治と思想』（1964年）の「あとがき」で野村は「たしかに中国の近代史は、いわゆる「近代化」の試みが、強固な封建反動勢力およびそれと結びついた外国帝国主義勢力によって、ことごとくに無意味に化せられて行く歴史にほかならなかった。そしてまた、やがて中国共産党に指導される勢力は、むしろこうした方向を見限り、あるいはそれと対抗することによってはじめて、中国史上に新たな地平線を切り開き得たのである。この意味では、中国の「近代」は、いわば「反近代」の中にしか「近代」を探り得ないような種類のものであるとすらいえるかも知れない」と述べている。普遍的な範疇を用いつつ「中国近代の思想的展開の独自性あるいは特殊性を検証したい」という関心があったとしているのも、竹内好らの前述の『中国革命の思想』と同じである⁽⁵⁰⁾。実際に野村はこの時期、竹内らの「日本のなかの中国」研究会（1960–1963年）及び後身

の「中国の会」(1963-1973年)の活動にも参加している(他の主な会員は安藤彦太郎、飯倉照平、今井清一、尾崎秀樹(秀実の弟)、新島淳良、野原四郎、橋川文三、藤田省三、光岡玄、矢沢康祐、山田豪一、京谷秀夫、今村与志雄ら)⁽⁵¹⁾。

世代的には上だが、西や野村と活動に重なる部分のある野原四郎(1903-1981、中国研究所)にも、1940年代末からの論考をまとめた『アジアの歴史と思想』(1966年)がある。野原は東京帝国大学文学部東洋史学科の卒業だが、当時から既成の東洋史学に批判的な視角を持ち、マルクス主義の影響を受け、歴史学研究会(1932年-)の創設にも関わっていた⁽⁵²⁾。その野原は戦後の自らの研究を振り返って次のように述べた。

日本人には五四時代(一九一五～二四年)以前の中国近代史なら、自分たちの経験を通じて、かなり理解できるはずである。中国にしても、それまでは日本と同様に欧米の近代化をモデルにして歩んできたのだから。

しかるに、それ以後の時期の中国の近代化の動きには、私をふくめて多くの日本人にとって実は理解しがたくもあれば、納得もいきがたいものが少なくないと思う。一つには、そうした時期の起点として五四を探求してみようとする関心があり、他方には戦後日本の進んでいく方向について、そのような中国方式が何かの参考になりはしまいか、という考えから、その方式の創成期として五四をとらえようとする関心がある。……せんじつめれば、西欧や日本と違う、中国の民主主義思想とその実践を探り出すことに、力点がおかれているとあってよい。

野原がこのように主張した背景には、「中国の思想史を論ずる場合、マルクス主義がつねに正統的地位をしめていたかのように考えずに、その点でも歴史主義をつらぬくこと」が必要であり、また「その〔中国の歴史学の〕基底にある中国人の歴史観を明らかにしていく必要があるだろう。彼らは彼らなりにしか歴史の実体に光をあてることができないのだから」というある種の相対主義、本質主義がある⁽⁵³⁾。本書は革命思想に止まらず、胡適やアナキスト、顧頡剛など相対的に多様な対象を扱っているが、「西欧や日本と違う」中国の独自性の探求という根本の問題意識には共通する点が大きかった。

このように、中国の近代の普遍性よりも特殊性を重視し、中国の「反近代の近代」性を評価する傾向は、日本の中国近現代思想研究全体の一つの潮流と言えた。他には高田淳(東京女子大学文理学部)も、1960年代の論考を元にまとめた『中国の近代と儒教——戊戌変法の思想』(1970年)で、儒教から「見事なる」脱却を遂げた日本と、儒教と近代西洋との間で長い抵抗の苦しみを強いられたが故に最後には真の近代化を成し遂げた中国とい

う対比を基本構図として論じている。

それ〔中国の儒教〕は一つの文明の体系なのであり、自らの固有な形態を必然的なものとして形成してきたものである。その点で、中国の場合、古くなったからといって日本のようにとり換えることができなかつたのであり、自らの五体を解体させることなしに、自らが他になることはできなかつたのである。……

近代の資本主義と帝国主義の世界的膨張に対する中国の抵抗は、中国という国家・民族と文明・思想の自己保存と自己崩壊との様々な形態と段階を踏んで行なわれた。……

中国思想の長い展開の中から、その伝統に自らが貫ぬかれながら自己変革をなし遂げた、その断絶と転生の契機を、それぞれの場合に即して見定めたいというのが、この小論の目的の一つである⁽⁵⁴⁾。

ただし、高田は以後は近現代思想ではなく、王夫之（船山）や易学の研究に転じている。伝統に貫かれながらの変革、というテーマは、突き詰めると伝統そのものへの関心に向かいかねなかつたということだろうか。

いずれにせよ、こうした問題意識の明確化は、研究の対象や論点が特定の分野に集中するという傾向にもつながった。具体的には、清末の近代思想受容と、革命思想の形成というテーマである。結果としてこの時期には、魏源や嚴復による西洋知識の紹介に一定の関心が向けられた他は、孫文に代表される清末革命派に研究の関心が偏った感がある。主な書籍のみ挙げても、野沢豊『孫文——革命はまだ成らず』（1962年）、藤井昇三『孫文の研究——とくに民族主義理論の発展を中心として』（1966年）、野沢豊『孫文と中国革命』（1966年）、安藤彦太郎、岩村三千夫、野沢豊編『現代中国と孫文思想』（1967年）、横山英、中山義弘『人と思想27孫文』（1968年）、堀川哲男『人と歴史シリーズ東洋16孫文——救国の情熱と中国革命』（1973年）などがこの時期に刊行されている。

清末以外で思想研究の関心が集まったのは、前述の野原の文章にも言及のある、「新民主主義革命」の発端とされた五四運動の時期だった。特に突出して研究が集中したのが、中国共産党の創設者の一人である李大釗のマルクス主義受容の過程である。この時期の代表的な研究だけでも、里井彦七郎「李大釗の出発——「言治」期の政論を中心に」（1957年）、丸山松幸「李大釗の思想とその背景——思想の体系化と実践との関係について」（1957年）、丸山松幸「アジア・ナショナリズムの一原型——李大釗のアジア論について」（1960年）、野原四郎「アナキストと五四運動」（1960年）、西順蔵「李大釗」（1961年）、今村与志雄

「五四前夜の思想状況の一側面——李大釗に即して」(1961年)、野村浩一「「五四」時代のナショナルな思考——李大釗について」(1962年)、野村浩一「近代中国の思想家——李大釗とマルクス主義」(1963年)、近藤邦康「「民国」と李大釗の位置——辛亥革命から五四運動へ」(1964年)、丸山松幸「李大釗の思想——中国におけるマルクス主義の受容」(1966年)、嶋本信子「五四期における十月革命の影響——李大釗の思想を通して」(1966年)、丸山松幸『五四運動——その思想史』(1969年)など、枚挙にいとまがない。京都大学文学部東洋史学科出身の森正夫も『中国人物叢書11李大釗』(1967年)や「李大釗と「世界の資本主義」」(1970年)を発表している。李大釗研究専門の目録である丸山松幸、斎藤道彦編『李大釗文献目録 付選集未収資料』(1970年)も編纂された。これらの研究において、李大釗のマルクス主義理解が中国の現実や思想的伝統と結びついた独特のものだったことは、総じて肯定的に評価された⁽⁵⁵⁾。ただその裏返しとして、同じく中国共産党の創設者でありながら全面西洋化論を唱えた陳独秀が、後に党を除名されたという政治的な経歴の問題もあり、不当に低く評価されたことも指摘される⁽⁵⁶⁾。

もちろん、以上とは異なる方向の研究もあった。たとえば保守派だった宇野哲人の米寿記念論文集である東京大学中国哲学研究室編『中国の思想家』(1963年)が清末民国の時期から選んだのは、龔自珍、曾國藩、羅振玉、康有為、吳稚暉、孫文、蔡元培、梁啓超、陳独秀、魯迅、胡適だった(著者はそれぞれ内田道夫、稲葉誠一、島邦男、山口一郎、倉石武四郎、荒木修、大村興道、佐藤震二、田所義行、尾上兼英、竹田復)⁽⁵⁷⁾。孫文や魯迅はさておき、伝統学術を重視した思想家や革命派と対立した改革派、リベラリストなどに関する研究をこの時期に行っていたのは、やや上の世代、あるいはここまで見たような研究団体とは距離を取った研究者たちだった。

3 毛沢東思想研究と文化大革命

そして当然ながら、戦後日本の中国近現代思想研究の最大の課題となったのは毛沢東思想だった。戦後の非常に早い段階にも、中国研究所の岩村三千夫が『毛沢東の思想』(1948年)や改訂版の『毛沢東の思想とその発展』(1951年)を刊行していた。ただ、内容は「新民主主義論」や同時代の中国共産党の主張の紹介に近いものだった。岩村はの中で、毛沢東思想が「すでにマルクスやレーニンが、中国とアジアについてのべた理論の継承であり、そのいつそうの発展であつた」と同時に、「マルクス・レーニン主義の中国版」であり、「マルクス・レーニン主義のアジア版として代表的なものである」という点をとりわけ強調している⁽⁵⁸⁾。日本共産党系の出版社から毛沢東選集刊行会編訳『毛沢東選集』第1-6巻(1952-1954年)も出版され、その後改版を重ねた。

歴史学あるいは思想史の分野からより学問的な毛沢東研究がなされるようになるのは1960年代である。武田泰淳、竹内実『毛沢東——その詩と人生』（1965年。実際にはほぼ竹内の執筆）は、『星火燎原』所収の回想録などを元に毛沢東を伝記的に研究した重要な成果である。こうした実証的な方向での毛沢東研究として、『毛沢東選集』に収録された文章とその初出原文を対照する作業を行った今堀誠二（1914-1992、広島大学政経学部）の『毛沢東研究序説』（1966年）が挙げられる。

この時期、中国では、1965年11月の姚文元「評新編歴史劇『海瑞罷官』」発表、歴史学者・北京市副市長だった呉晗への批判を経て、まさに文化大革命が開始されていた。文化大革命は日本の一般社会からも大きな関心を集め、関連する書籍や雑誌記事が大量に発表された。毛沢東を扱った学術的な性格の強い書籍だけを挙げて、新島淳良『毛沢東の哲学』（1966年）、小野信爾『中国人物叢書12毛沢東』（1967年）、浅川謙次、安藤彦太郎訳『世界の大思想Ⅱ -16毛沢東』（1967年）、新島淳良『毛沢東の思想』（1968年）、山口一郎『現代中国思想史』（1969年）、宇野重昭『人と思想33毛沢東』（1970年）、徳田教之『毛沢東主義の形成——1935年～1945年』（1971年）、竹内実『毛沢東ノート』（1971年）、竹内実『毛沢東と中国共産党』（1972年）など多数に及ぶ。

毛沢東思想に関する史料としても、詳細な校正で知られる竹内実監修『毛沢東集』第1-10巻（1970-1972年）の他、文革中の毛の文章を集めた新島淳良編『毛沢東最高指示——プロレタリア文化大革命期の発言』（1970年）、東京大学近代中国史研究会訳『毛沢東思想万歳』上・下（1974-1975年）などが翻訳・刊行されている。

日本における文革をめぐる議論については前著で触れたのでここでは省略する。一つだけ取り上げたいのは、毛沢東思想、つまりマルクス主義の中国化の問題をこの時期の日本の研究者がどのように捉えていたのかという問題である。たとえば野村浩一は『中国革命の思想』（1971年）で次のように述べている。

これまでの研究が、どちらかといえば中国のマルクス主義という視点に立ち、マルクス主義という一つの思想なり理念なりの中国におけるあらわれ方を探ってきたのに対し、こうした考察は、むしろ中国のマルクス主義、つまり中国社会そのものの動態へと視点を移して行くことをも意味するのである。……私は、この論文を経過することによって、むしろ、毛沢東思想の土着性をより強く感ずるとともに、またマルクス主義のヨーロッパ的特殊性をも意識するようになった。……

他国を学ぶということは、畢竟するに、われわれ自身のかかみであるにすぎない⁽⁵⁹⁾。

問題関心がより中国の伝統社会へとむかうとともに、そうした中国を研究するのは（中国を知ること自体よりも）「われわれ自身」つまり日本を知るためにほかならないという「鏡」論が、1970年頃から明確に表れてくるようになる。これは観察の主体の問題を重視する竹内好の議論の一つの帰結とも言えた。

4 現代中国文学研究の展開

1962年、東京大学東洋文化研究所の東アジア第二部門（宗教、思想、文学、美術）で、文学部と兼任だった小野忍が主任となって「近代中国の思想と文学」研究班が組織された。参加者は丸山昇、仁井田陞、野村浩一、竹内実、近藤邦康、木山英雄、新島淳良らである。1965年に小野が兼任を解消した後は尾上兼英が主任となり、班名も「中国の思想と文学」と改めた。小野の退職に際しては、数多くの文学者と思想家を扱った論文集『近代中国の思想と文学』（1967年）を刊行している⁽⁶⁰⁾。同班にはさらに山之内正彦、高田淳、前野直彬、溝口雄三、田仲一成らが加わって思想研究と文学研究をそれぞれ展開し、1969年には「清末民初の革命思想と運動」（高田、溝口、西川正二ら）、「1930年代文学の諸問題」（尾上、丸山、竹内ら）の二つの研究に分かれた。1972年には「明清時代の思想と文学」（溝口、小林（岡本）サエ、尾上、田仲、伝田章、青山宏ら）と「近現代の思想と文学」（高田、丸山松幸、三宝政美、尾上ら）という時代ごとの区分に再編された。研究班の成果はやはり所誌『東洋文化』などに発表されている⁽⁶¹⁾。

作品紹介の面では、1962–1963年に、小野忍、竹内好、中野重治、増田渉、松枝茂夫編『中国現代文学選集』全20巻（平凡社）が刊行された。巻数の増加に伴って「記録文学集」「詩・民謡集」「少数民族文学集」などを含むのが特徴で、刊行時にも「この選集の大きな特色は、収録作品が小説のみにかたよっていないという点にある」「新しい中国文学においては小説のみを重んずることなく、あらゆるジャンルの文学にわたってひとしく重視するのが現状である」ということが大きく取り上げられていた⁽⁶²⁾。

また1963–1965年には、日本共産党中央委員会宣伝教育文化部中国革命文学選編集委員会編『中国革命文学選』計15巻（新日本出版社）も刊行されている（訳者は三好一、伊藤克、石川賢作、木山舵夫、伊藤三郎、丸山昇、仁戸丹、西城秀枝、島田政雄）。内容は前述の『中国現代文学選集』のカテゴリーで言えば全て記録文学に属するもので、刊行の目的も「今日の中国のすぐれた革命文学をつうじて、わが国の人民は、中国人民の解放闘争の真実のすがたを深く知り、その果敢なたたかきを、自分自身のものとして理解することができます。条件はちがっても、外国の帝国主義の支配のもとにあるという点でかつての中国人民とおなじ境遇におかれているわが国の勤労人民にとって、世界の革命的文学の諸作

品とともに、「中国革命文学選」は大きなはげましとなるでしょう⁽⁶³⁾と述べられている。日本共産党はこの他にも中国革命関連の書籍を多数刊行していたが、1966年の中国共産党との決裂後はこの種の書籍は急速に減少する。

1970-1971年には、小野忍、高橋和巳、竹内好、武田泰淳、松枝茂夫編『現代中国文学』全12巻（河出書房新社）が刊行された。

この時期には、中国文学に関する紀要や研究会誌の創刊も相次いだ。『桜美林大学中国文学論叢』（第1号～第27号、1968年3月～2002年3月）、『関西大学中国文学会紀要』（第1号～、1968年3月～）、九州大学中国文学会『中国文学論集』（第1号～、1970年5月～。『中国文芸座談会ノート』の後継）、中国文芸研究会『野草』（第1号～、1970年10月～。発行場所は大阪外国語大学中国語第一研究室）、颯風の会『颯風』（第1号～、1972年3月～。発行場所は中島長文方）などである。『野草』の創刊に際し、相浦泉（1926-1990、京都大学文学部中国語学中国文学講座卒業、大阪外国語大学外国語学部）は次のように述べている。

日本と中国との長い歴史関係から、中国文学の研究・紹介は古い伝統をもっており、中国の文化は、日本文化の中に血肉化していると言えます。

しかしながら、明治以来の日本の近代化や脱亜傾向と、その間にあった。[ママ]日本による中国への軍事侵略は、日本と中国を、地理的・文化的近接を超えて、まるで遠い異国に変えてしまいました。

ことに、「五四」（1919年）以来の中国近代史に即して考えてみれば、そのことはいっそうなまなましく私たちの目にうつってくると思います。そういう意味で、中国の近代文学は、われわれが考えるべき多くの根源的な問題を提起しているばかりでなく、多くの点でわれわれにとって、わが身をうつす鏡になっています⁽⁶⁴⁾。

ここではあくまで日本との関係で中国近代文学を論じることの重要性が強調されている。そこで言及されるのがやはり「わが身」日本をうつす「鏡」としての中国という議論である。

こうした中で起きた1971年のニクソン訪中発表、そして1972年の日本と中華人民共和国の国交樹立によって、日本の中国研究は新たな段階に入っていくことになる。

5 中国近現代思想に関する史料の編集・翻訳

1970年代初めには、中国近現代思想に関する基本史料の翻訳刊行も相継いだ。これらの史料集にも総じて文化大革命が色濃く影を落としている。

山田慶児編集・解説『現代革命の思想3中国革命』（1970年）は、孫文、章炳麟、魯迅、毛沢東を軸に、清末から文革までを扱ったもので、訳者は中島長文、中島みどり、山田慶児、荒井健、萩野脩二で、他に島田虔次、竹内好、新島淳良、北京外文出版社の訳文を再録している。「固化し形骸化した伝統的諸価値を否定しつつ、しかし、西欧近代の価値体系をそっくりそのまま受け入れることをも拒否しつつ、中国革命は、解放から社会主義と工業化の実現への過程を、手さぐりでたどってきた。それは、近代が生み出したマイナス価値をも同時にのり超えようとする、巨大な実験であった」⁽⁶⁵⁾として、中国の伝統と西洋近代をとともに否定し乗り越えるものとして文化大革命が位置づけられている。

西順蔵、島田虔次編訳『中国古典文学大系58清末民国初政治評論集』（1971年）は、京大人文研中国近代史研究班の島田虔次、堀川哲男、坂出祥伸、小野和子、狭間直樹、藤田敬一訳の「公羊派」「洋務派」「変法派」と、西川喜久子、伊東昭雄、西順蔵、野村浩一、丸山松幸訳の「太平天国」「革命派」「新文化運動」の二つの部分からなる。西による「総説」の内容は基本的に中国共産党の歴史観に沿ったもので、清末から五四運動にかけての期間はあくまで「中国共産党という明確な自覚的な反帝反封建闘争の組織が形成される以前の、力強いが混沌たる人民抵抗の時期」と評価される⁽⁶⁶⁾。

京都大学関係の研究者による革命論集が小野信爾、吉田富夫、狭間直樹『中国文明選15革命論集』（1972年）である。原文と訳文（文語の場合は書き下し文も）に解説を併記した独特の形式を取っている。太平天国や譚嗣同、康有為、瞿秋白、毛沢東を小野、章炳麟、孫文、李大釗を狭間、整風運動と文化大革命を吉田が担当している。文化大革命はなお中国革命の到達点と評価されているものの、「中国革命は他面において、情容赦もなく各段階の指導者に歴史の審判を下してきた。……戊戌維新の輝ける指導者康有為、梁啓超は辛亥革命ではたちまち反革命に転落し、辛亥の闘士の多くも五・四期には批判・打倒の対象に変わった。「中国のレーニン」とまで呼ばれたことのある陳独秀、中華人民共和国主席として一時は毛沢東の後継者と目された劉少奇などもその例であるし、今日、いろいろととりざたされている林彪もその範疇に入るかも知れない」⁽⁶⁷⁾といった説明には苦しさも感じる。

翌年に刊行された竹内実編『ドキュメント現代史16文化大革命』（1973年、他の訳者は竹内良雄、山谷弘之、団真樹子）ではこの点は明確で、「文革のもつ意味は重層的であるが、窮極的には権力闘争にほかならなかった。五重、あるいは七重の層のうち、権力レベルにもっとも根本的な意味があるとすれば、ほかの層は、じつは権力闘争を正当化するためのバールであった。しかしまた逆に、たとえば思想レベルなら思想レベルに、窮極的な意図があったとすれば、権力闘争はそれに奉仕するものであった。この重層的な意味は、〈事件の当事者が頭のなかに描いている事件の過程〉としても、重層的であったのだろう」

と喝破している⁽⁶⁸⁾。同じシリーズには、国民革命から中華人民共和国の成立までを扱った野村浩一編『ドキュメント現代史9中国革命』(1974年、他の訳者は芝田稔、大西浪子、藤田正典、辻康吾、橋本南都子、赤尾修、加藤祐三ら)もある。

同年の横山英編訳『ドキュメンタリー中国近代史』(1973年)も、「戦後における中国近代史研究の成果や、新しく発掘・整理・公開された史料」に加え、「中国自体においても、数年前の「中ソ論争」「プロレタリア文化大革命」の過程で、旧来の考え方を修正する意見がだされ」たことを挙げて、「今日では、中国近代史の体系を根本的に再検討して新しくつくり直さなければならない時期に当面しています」と、原史料を検討することの重要性を主張している⁽⁶⁹⁾。

6 研究対象の多様化

このように利用可能な史料の増加という背景もあり、1970年代に入ると、再び中国近現代思想研究の対象が多様化していく傾向が見られる。たとえば大谷敏夫の魏源研究、坂野正高の馬建忠研究、丸山松幸のアナキズム研究などの他、横山英、楠瀬正明、竹内弘行、後藤延子、坂出祥伸らが康有為・梁啓超に関する論考を発表している。単著では、市古宙三『近代中国の政治と社会』(1971年)、高田淳『章炳麟・章士釗・魯迅——辛亥の死と生と』(1974年)などがこの時期にまとめられている。また五四運動期を中心に女性解放思想にも関心が高まり、中山義弘や小野和子、末次玲子らが研究を発展させた。

IV 中国近現代思想研究の転換：

1970年代後半～

1 中国研究の拡大と対象のさらなる多様化

1976年の文革終結から1978年の改革開放開始の時期には、文革期や日中国交樹立の時期と並ぶ一種の中国研究のブームが見られた。各地の大学の中国文学、中国哲学研究室で、早稲田大学中国文学会『中国文学研究』(第1期～、1975年12月～)、『東洋大学文学部紀要(仏教学科・中国哲学文学科篇)』(第1輯～第38輯、1976年3月～2013年3月。第2輯より『東洋学論叢』と改称)、『名古屋大学中国語学文学論集』(第1輯～、1976年9月～)、『中国思想史研究』(第1号～、1977年9月～。京都大学文学部中国哲学研究室)、『お茶の水女子大学中国文学会報』(第1号～、1982年4月～)などが次々と創刊された。

大学以外の研究会でも、樽本照雄らの清末小説研究会の『清末小説研究』(後『清末小説』と改題。第1号～第35号、1977年10月～2012年12月)や『清末小説から』(第1号～、

1986年4月～)、吉田富夫らの中文研究会の『未名』(第1号～、1982年2月～)、中国俗文学研究会の『中国俗文学研究』(第1号～、1983年7月～)など、文学研究を中心に新しい展開が見られた。

前著でも触れたように、この時期には、京都大学人文科学研究所の中国近代史研究班でも、それまでの辛亥革命研究の成果を狭間直樹『中国社会主義の黎明』(1976年)や小野川秀美、島田虔次編『辛亥革命の研究』(1978年)としてまとめるのと並行して、より新しい時代へと研究を展開していった。1970-1971年に汲古書院より『原刊本影印新青年』全12巻が復刻されると、後継の「五四運動の研究」班(1973-1978年、班長は島田虔次→竹内実→狭間直樹)が開始された。以後、人文研中国近代史研究班は狭間の下で「民国初期の文化と社会」(1978-1983年)、「中国国民革命の研究」(1983-1988年)、「1920年代の中国」(1988-1993年)と展開していく。なおこの他、大学紛争の関係で東京都立大を辞職した後、京大人文研に着任した竹内実(1923-2013)の中国現代史研究班があり、「現代中国における政治過程と民衆の意識」(1975-1980年)、「現代中国の社会と文化」(1980-1985年)、「転形期の中国」(1985-1987年)のテーマで研究を実施した。

東京でも、野沢豊らの中国現代史研究会がその国民革命研究の成果を『中国国民革命史の研究』(1974年)として発表した。これ以後、アヘン戦争から中華人民共和国初期までを扱った『講座中国近現代史』全7巻(1978年)や、山田辰雄『中国国民党左派の研究』(1980年)、野沢豊編『中国の幣制改革と国際関係』(1981年)、中国現代史研究会編『中国国民政府史の研究』(1986年)など、中国国民党と国民政府を対象とした研究が展開されていく。関西でも同名の中国現代史研究会が組織され、会誌『中国現代史研究通信』や共同研究の成果である芝池靖夫編著『中国社会主義史研究——中国解放区研究序説』(1978年)、池田誠編著『抗日戦争と中国民衆——中国ナショナリズムと民主主義』(1987年)を刊行するなど、歴史学の分野でも研究の対象とする範囲は広がっていった。思想史について言えば、特に抗日民族統一戦線理論の形成過程や、毛沢東の「新民主主義論」に関心が集まり、野沢豊、古厩忠夫、石島紀之、姫田光義、宇野重昭、安井三吉、池田誠らが論考を発表している。共産党でも国民党でもない第三勢力の思想や運動に関する研究も、平野正や菊池貴晴がこの時期に開始している。

2 戦後の中国近現代思想研究への批判と見直し

前述したこの時期の中国近現代思想研究に関する基礎史料整理の作業のうち、もっとも大部のものとなったのが、西順蔵編『原典中国近代思想史』(1976-1977年)である。清末から中華人民共和国成立までの思想史関連史料を編集・翻訳した全6巻の大著である。「総

序」で「原典中国近代思想史の会」として名が挙がっているのは西順蔵、伊東昭雄、小島晋治、近藤邦康、新島淳良、野村浩一、丸山昇、丸山松幸である。作業自体は1963年に開始され、初期には西川喜久子が参加していたという。前述の1971年の『清末民国初政治評論集』から再録された文章がある一方、京都大学の島田らが訳した文章は訳し直されている。西は本シリーズの目的を次のように説明する。

中国古典の権威の中に閉じこもって歴史の大変動を無視する研究や、革命の苦難の過程と切り離して新中国の成果だけをその都度紹介する研究や、中国をただ「学問的」方法によって裁断すべき材料としか見ない研究等々によっては、生きた中国を認識し理解することは不可能ではないか。近代資本主義の「弱肉強食」世界の中にひきずりこまれ、強者＝欧米への追随、弱者＝アジアに対する侵略によって「発展」し、欧米の物量に敗れたという面もあるがより根本的にはアジア人民の抵抗に敗北したにもかかわらず、われわれ日本人には現在でもなおその自覚がきわめて弱い。この日本近代の欧米偏重、アジア蔑視の「文明開化」の体質を批判する鏡として、日本帝国主義の侵略を打ち破った中国の人々の近代の歩みのあとをたどることが必要ではないか⁽⁷⁰⁾。

この時期になるとさすがに「革命」というモチーフはかなり後景に退いているが、竹内好以来の枠組は基本的に継承され、むしろ強化されているようにも見える。くりかえされる「われわれ日本人」にとっての「鏡」としての中国像がそれである。

1980年代に入り、こうした中国研究のあり方、中国の見方に根本的な批判を展開したのが溝口雄三（1932-2010）である。もともと溝口は明代の思想史からスタートし、近世の日中儒教の比較に関する研究などを専門としていた。溝口は1970年代から日本の中国思想史研究に対する批判的な発言を行ってきたが、それが大きな注目を集めるきっかけとなったのが、溝口が東京大学文学部着任前後に発表した「「中国の近代」をみる視点」（1980-1981年）である。溝口は同論文で戦後日本の中国観を竹内好に代表させ、これを強く批判した。

その場合その〔津田左右吉らの近代主義的中国観を批判する〕有力なよりどころの一つが、たとえば竹内好氏の「魯迅」や「中国の近代と日本の近代」にみられる中国観であったろう。それは日本のいわゆる脱亜的な近代主義を自己批判し、その反面それの対極におしやられていた中国に、かえってあるべきアジアの未来を憧憬したものであり、端的にいうならばわたしたちの中国研究の起点には基本的にこの憧憬が、まずあった。この憧憬なるものは、さまざまの日本内的自己意識、すなわち日本の近

代百年にかかわるさまざまな反あるいは非日本意識の対極に、いわば反自己意識の投影像として自己内に結ばれたそれにむけられたもので、だからそれはあらかじめ主観的なものであった。憧憬は客観的な中国に対してではなく、主観的に自己内に結像された「わが内なる中国」にむけられたものであった⁽⁷¹⁾。

つまり、「わが内なる中国」という問題意識は、むしろ現実の中国の不在をもたらし、それが文革の礼賛という誤った中国観を招いたとしたのである。その上で溝口は、ヨーロッパへの抵抗を「中国の近代」とする竹内の議論に対して、中国の近代とヨーロッパの近代はそもそも別個のものだとして、前近代からの連続性、内発的発展の要素を重視すべきと主張した。

事実とはいえば、もともと中国の近代はヨーロッパを超えてもいなければ、とり残されてもたちおくれでもない。それはヨーロッパとも日本とも異なる歴史的に独自の道を、最初から辿ったのであるし、今でもそうなのである。

……中国の近代はほかならぬそれ自身の前近代をあらかじめ母胎としており、したがってそれは中国の前近代の歴史的独自性をみずからの内に継承するものである。……いいかえれば、もともと中国はヨーロッパ的近代への趨向をはなからもたなかったものであり、それは〔西欧型に追随する条件の〕「欠如」や「虚無空白」というよりは、やむにやまれぬ中国的近代の充実であり、その充実の継承のゆえに彼らはまたその前近代の母斑の制約をうけざるをえない。そしてついでにいえば、その制約との葛藤のあらわれの一つがたとえば文化大革命の「十年の動乱」でもあろうというのである⁽⁷²⁾。

中国の近代をヨーロッパの近代と完全に切り離し、専ら前近代との連続性を強調する点に溝口の議論の特徴がある。この点で溝口は、資本主義の成立をもって「近代」とみなすマルクス主義の発展段階論などとは「近代」の捉え方自体が異なっていた。

溝口はこの後、「近代中国像は歪んでいないか」（1983年）や「ふたたび〈近代中国像〉をめぐって」（1986年）で、芝原拓自、近藤邦康、久保田文次、中村義、小野川秀美、西順蔵らの洋務論を取り上げ、アヘン戦争と「西洋の衝撃」を近代の開始とする時代区分、そして「革命」を最初から到達点として設定し、そこから遡及的に中国近代史の展開を描く歴史観（後に「革命中心史観」と呼ばれるようになる）として激しく批判した。こうした溝口の議論には当然ながらさまざまな反論が寄せられたものの、その反論が「近代中国

像」のあり方ではなく、個々の事実認定の是非を中心になされたこともあり、議論はかみ合わなかった⁽⁷³⁾。

ただ、こうした議論に加え、改革開放下の中国自体の急速な変化と、中国や英語圏における思想史研究の紹介などからも刺激を受け、この時期に中国近現代思想研究は非常に活発化した。それまでの研究をまとめた近藤邦康『中国近代思想史研究』（1981年）、丸山松幸『中国近代の革命思想』（1982年）、坂出祥伸『中国近代の思想と科学』（1983年）、有田和夫『清末意識構造の研究』（1984年）、河田悌一『中国近代思想と現代——知的状況を考える』（1987年）、溝口雄三『方法としての中国』（1989年）、野村浩一『近代中国の思想世界——『新青年』の群像』（1990年）、大谷敏夫『清代政治思想史研究』（1991年）などもこの時期に刊行されている。金観濤、劉青峰『中国社会の超安定システム——「大一統」のメカニズム』（若林正文、村田雄二郎訳、1987年）、李沢厚『中国の文化心理構造——現代中国を解く鍵』（坂元ひろ子、佐藤豊、砂山幸雄訳、1989年）、林毓生『中国の思想的危機——陳独秀・胡適・魯迅』（丸山松幸、陳正醜訳、1989年）、余英時『中国近世の宗教倫理と商人精神』（森紀子訳、1991年）など中国語圏の新しい研究が次々と翻訳紹介され、注目を集めたのもこの時期である。

溝口はさらに1985年に従来の東大中哲文学会を改組し、東大中国学会を新たに組織している（後、中国社会文化学会に改称）。『中国——社会と文化』（第1号～、1986年6月～）に掲載された記事によればその趣旨は以下のようなものである。「新たにした第一点は、明治以来の学部・学科制の枠内にとどまっていた旧来のあり方から脱皮し、真に広域的・全国的な学会を目指すものとしたこと、第二点は、会の目的を「中国の社会と文化の研究」へと拡大し、これにともない研究の対象も、歴史学を含む人文科学はもとより、法学・経済学など社会科学および中国と関連する諸地域の研究諸分野までを広く包容しようとするに至ったこと、この二点であります」⁽⁷⁴⁾。もともと日本の中国思想研究と中国文学研究には重なるところがあったが、同会の主旨は、それを歴史学を含むさらに広い範囲へと拡大しようというものだった。

東京大学の中国文学研究室・中国哲学研究室では、大学院生を中心に「新青年」読書会も組織され、『猫頭鷹（マオトウイン）——近代中国の思想と文学』（第1号～第7号、1983年6月～1989年12月）を発行した。執筆者は代田智明、陳正醜、坂井洋史、藤井省三、山口守、宮尾正樹、佐藤豊、坂元ひろ子、緒形康、村田雄二郎、長堀祐造、伊藤徳也、湯山土美子らである。代田智明（1951-2017）は同誌の冒頭で次のように述べた。

ものを書く枠組が失われて久しい。……枠組とは、たとえば丸山真男や竹内好のこ

とである。戦後に近代中国を専攻した人々にとって、この二人の影響はかなり大きなものであった。……その枠組は、それぞれ、日本の高度成長の弊害と中国の文化大革命の罪過がはっきりした頃から、色褪せてしまったように思われる⁽⁷⁵⁾。

この文章の題名「近代論の構図——「中国とヨーロッパ」をめぐって」がまさに示すように、中国の近代をヨーロッパや日本の近代に対してどのように位置づけるかが戦後日本の中国近現代思想研究における最大の課題であったのだが、この時期にはその既存の議論の枠組が完全に失われ、新たな議論のあり方が模索されていたと言える。

文学の分野でも、こうした従来の見方に対する見直しは進んだ。1985年に刊行された丸山昇、伊藤虎丸、新村徹編の『中国現代文学事典』は、次のように指摘する。

かつての中国文学研究会の時代の、日中両国の文学者の間に存在する同時代性を根拠にしたアプローチや、戦後の一時期に強かった、中国革命への共感と敬意を出発点としたアプローチが、それぞれ貴重なものを残したことを、今でも私たちは認めるが、現在の私たちにとっては、それだけでなく、中国文学と私たちとの間にある距離を認識したうえで、その距離を埋めるために何が必要かについての方法意識と、急速に増加している資料が十分活用されるように整理されることとが、強く求められている、と思われる⁽⁷⁶⁾。

日本と中国の「距離」の認識が必要という考えは、やはり竹内好的な中国観や、日本の「鏡」としての中国認識といったこれまでの中国文学理解への根本的な見直しを意図したものと言える。こうして戦後に生まれた一種の「グランド・セオリー」が解体され、利用可能な史料が急速に拡大したことは、問題関心の多様化とあいまって、研究の細分化と高度な専門化をもたらし、現在に至っている。

作品の面でも、1984-1986年に、相浦泉、飯倉照平、伊藤虎丸、伊藤正文、今村与志雄、竹内実、立間祥介、丸山昇の編になる『魯迅全集』全20巻が刊行される一方、かつての魯迅に偏重した研究状況の是正が図られ、周作人、茅盾、郁達夫、丁玲、老舍、蕭紅、趙樹理など、研究対象とする作家の多様化がいっそう進んだ。1987-1990年に刊行された市川宏、井口晃、井上光晴、夏堀正元、針生一郎の編になる『現代中国文学選集』全13巻はさらに新しい世代の作家の作品を扱っている。

お わ り に

以上、戦後日本の中国近現代思想研究の大まかな展開とその背景、そしてそれらの相互作用について概観してきた。

戦後に本格的に始まった日本の近現代中国研究は、戦前の研究を強く批判したが、その一方、特にその初期の担い手の多くは、戦前もしくは戦中から継続して中国に関わってきた研究者たちだった。彼らにとって最初の大きな関心事となったのは、中国の近代をヨーロッパの近代、中国の伝統との間でどのように位置づけるかだった。歴史学分野では、まず清末から辛亥革命にかけての時期が対象となり、西洋の近代思想の受容の過程と、それに対する反応、革命思想の形成が研究の中心となった。文学分野では、魯迅に代表される五四期の新文学が研究の対象となり、そこから生まれた、中国の近代を西洋に対する抵抗の過程と捉える竹内好の見方が力を持つこととなった。またそうした発想は戦前のアジア主義の再評価、中国と日本の抱える問題の共通性といった議論へもつながっていった。ただ、歴史学において「世界史の基本法則」と中国の特殊性をどう捉えるかという緊張関係が非常に大きな問題となったのと比べると、文学や思想の研究においては、中国の独自性や伝統との連続性を肯定的に評価する見方が当初から支配的であったように見える。1960年代に入って戦後世代の研究者が台頭するとその傾向はより強まった。中国近現代思想研究のテーマが革命思想に集中する傾向が進み、「マルクス主義の中国化」が非常に高く評価された。また認識主体の問題を非常に重視した竹内好とその影響を受けた研究者たちの議論は、中国を研究するのはむしろ日本を知るためであるという「鏡」論のような一種極端なものへとつながっていく場合もあった。

こうした状況は1970年代に入って次第に変化しはじめる。文化大革命の実態に関する情報の伝播、日中の国交樹立、そして利用可能な史料の急速な増加がその主な背景である。中国に対する見方が次第に相対化されていく中、研究のテーマも次第に多様化していった。1980年代に入ると、中国研究が急速に拡大する中で、それまでの中国の見方に対して根本的な疑問が呈され、むしろ中国との「距離」の認識の必要性が提起されるに至る。これ以後、「グランド・セオリー」の解体によって、研究の個別化と専門化が進んだ。ただ一方で、新たな研究の枠組がどのようなものであるべきかは、それ以降、現在に至るまで未解決の課題であり続けているように思われる。本稿で検討した内容が、この問題に関する現在そして今後の議論の展開にとって何らかの参照材料となることを願う。

註

- (1) 小野寺史郎『戦後日本の中国観——アジアと近代をめぐる葛藤』中央公論新社、2021年。
- (2) なお本稿の執筆にあたっては、山根幸夫編『中国史研究入門』下、増補改訂版、山川出版社、1995年、を参考とした。
- (3) 倉石武四郎講義ノート整理刊行会編『倉石武四郎講義——本邦における支那学の発達』汲古書院、2007年。
- (4) 戸川芳郎「明治初期の大学制度といわゆる「漢学」——近代アカデミズムの成立と中国研究（序章）」東大教養学部日本近代化研究会編『日本近代化とその国際的環境』東大教養学部日本近代化研究会、1965年、戸川芳郎「漢学シナ学の沿革とその問題点——近代アカデミズムの成立と中国研究の“系譜”（二）」『理想』第397号、1966年6月。
- (5) 坂出祥伸「中国哲学研究の回顧と展望——通史を中心として」『東西シノロジー事情』東方書店、1994年。
- (6) 陳璋芬「近代日本と儒教——「斯文会」と「孔子教」を軸として」九州大学文学部博士論文、1999年。
- (7) 中見立夫「日本的「東洋学」の形成と構図」岸本美緒責任編集『岩波講座「帝国」日本の学知3東洋学の磁場』岩波書店、2006年。
- (8) 水野博太「東京開成学校及び草創期の東京大学における漢学の位置と展開」『東京大学文書館紀要』第36号、2018年3月。
- (9) 前掲戸川「漢学シナ学の沿革とその問題点」、前掲坂出「中国哲学研究の回顧と展望」。
- (10) 飯倉照平「竹内好と武田泰淳」竹内好、橋川文三編『近代日本と中国』下、朝日新聞社、1974年、斎藤秋男「中国文学研究会とわたし」小島晋治、大里浩秋、並木頼寿編『20世紀の中国研究——その遺産をどう生かすか』研文出版、2001年。
- (11) 丸山昇「日本における中国現代文学」桜美林大学『中国文学論叢』第23号、1998年3月。
- (12) 野村浩一「中国近代史研究の手引きⅩⅢ思想史」『大安』第5巻第5号、1959年5月。
- (13) 宇野精一「序」神谷正男編『宗方小太郎文書——近代中国秘録』原書房、1975年。
- (14) 神谷正男『現代支那思想研究』理想社、1941年、21・59頁。
- (15) 東京大学百年史編集委員会編『東京大学百年史』部局史4、東京大学、1987年、69-97頁。
- (16) 東京大学百年史編集委員会編『東京大学百年史』部局史1、東京大学、1986年、502-524頁。
- (17) 前掲東京大学百年史編集委員会編『東京大学百年史』部局史1、624-643頁。
- (18) 前掲東京大学百年史編集委員会編『東京大学百年史』部局史1、726-742頁。
- (19) 前掲東京大学百年史編集委員会編『東京大学百年史』部局史4、69-103頁。
- (20) 「支那哲文雑誌・漢学会雑誌・東京支那学会報・東京支那学報総目録」『東京支那学報』第13号、1967年6月。
- (21) 前掲東京大学百年史編集委員会編『東京大学百年史』部局史4、340頁。
- (22) 前掲東京大学百年史編集委員会編『東京大学百年史』部局史4、373-476頁。
- (23) 末廣昭「アジア調査の系譜——満鉄調査部からアジア経済研究所へ」末廣昭責任編集『岩波講座「帝国」日本の学知6地域研究としてのアジア』岩波書店、2006年、38-44頁、伊藤一彦「日本の中国研究」野村浩一、山内一男、宇野重昭、小島晋治、竹内実、岡部達味編『岩波講座現代中国別巻2現代中国研究案内』岩波書店、1990年、9-10頁。
- (24) 京都大学文学部編『京都大学文学部五十年史』京都大学文学部、1956年、221頁。

- (25) 「序」京都大学支那哲学史研究会『東洋文化の問題』第1号、1949年6月。
- (26) 「巻頭言」『東光』第1号、1947年8月。
- (27) 京都大学七十年史編集委員会編『京都大学七十年史』京都大学、1967年、816-823頁。
- (28) 京都大学百年史編集委員会編『京都大学百年史』部局史編1、財団法人京都大学後援会、1997年、69-72頁。
- (29) 前掲京都大学百年史編集委員会編『京都大学百年史』部局史編1、95-106頁。1945年11月に総長を辞職した羽田亨は除いた。
- (30) 前掲京都大学百年史編集委員会編『京都大学百年史』部局史編1、128-133頁。
- (31) 前掲京都大学七十年史編集委員会編『京都大学七十年史』816-823頁。1967年以降は『京大教養部報』による。
- (32) 島田虔次『中国に於ける近代思维の挫折』筑摩書房、1949年、4・290頁。
- (33) 小島祐馬『中国の革命思想』弘文堂、1950年、9頁。
- (34) 竹内好「中国の近代と日本の近代——魯迅を手がかりとして」竹内好、吉川幸次郎、野原四郎、仁井田陞『東洋的社会倫理の性格』白日書院、1948年、8-10・26頁。後、「近代とは何か（日本と中国の場合）」と改題して、竹内好『現代中国論』河出書房、1951年、などに収録。
- (35) 前掲東京大学百年史編集委員会編『東京大学百年史』部局史1、735頁。
- (36) 木山英雄「代序（二）」丸山昇『丸山昇遺文集』第2巻（1968-1980）、汲古書院、2009年。
- (37) 丸山昇「戦後50年——中国現代文学研究を振り返る」『野草』第57号、1996年2月。
- (38) 長谷川健治、秦玲子「戸川芳郎氏聞き書き——戦後・山村工作隊・中国学（2）」『横浜国立大学留学生センター教育研究論集』第15号、2008年3月。
- (39) 代田智明「戦後近現代中国文学研究管窺——モダニティ・中国・文学」代田智明監修、谷垣真理子、伊藤徳也、岩月純一編『戦後日本の中国研究と中国認識——東大駒場と内外の視点』風響社、2018年。
- (40) 竹内好、山口一郎、斎藤秋男、野原四郎『中国革命の思想——アヘン戦争から新中国まで』岩波書店、1953年、i・iii頁。
- (41) 丸山松幸「会の歩み」『中国近代思想史研究会会報』第1号、1959年10月。
- (42) 竹内好「祝詞に代えて」『中国近代思想史研究会会報』第1号、1959年10月。
- (43) 竹内好「孫文観の問題点」『思想』第396号、1957年6月。後、竹内好『竹内好評論集3 日本とアジア』筑摩書房、1966年、などに収録。
- (44) 竹内好編『現代日本思想大系9 アジア主義』筑摩書房、1963年。
- (45) 目加田誠「創刊によせて」『中国文芸座談会ノート』第1号、1954年9月。
- (46) 小野川秀美『清末政治思想研究』東洋史研究会、1960年。
- (47) 小野川秀美「まえがき」小野川秀美、島田虔次編『辛亥革命の研究』筑摩書房、1978年。
- (48) 西順蔵「中国近代思想のなかの人民概念」西順蔵、野原四郎、荒松雄、中岡三益、旗田巍、幼方直吉編『講座近代アジア思想史1 中国篇1』弘文堂、1960年、369・372頁。後、西順蔵『中国思想論集』筑摩書房、1969年、に収録。
- (49) 野村浩一「清末公羊学派の形成と康有為学の歴史的意義——「持続の帝国」の没落」『国家学会雑誌』第71巻第7号、第72巻第1・3号、1957年7月、1958年1・3月。後、野村浩一『近代中国の政治と思想』筑摩書房、1964年、に収録。
- (50) 前掲野村『近代中国の政治と思想』242-244頁。

- (51) 馬場公彦『戦後日本人の中国像——日本敗戦から文化大革命・日中復交まで』新曜社、2010年、179-182頁。
- (52) 小嶋茂稔「戦前東洋史学の展開と歴史学研究会の創立者群像」歴史学研究会編、加藤陽子責任編集『「戦前歴史学」のアーリーナ——歴史家たちの1930年代』東京大学出版会、2023年。
- (53) 野原四郎『アジアの歴史と思想』弘文堂、1966年、2-3頁。
- (54) 高田淳『中国の近代と儒教——戊戌変法の思想』紀伊國屋書店、1970年、13・22・24頁。
- (55) 後藤延子「日本における中国近代思想史研究」『中国研究月報』第43巻第1号、1989年1月。
- (56) 古厩忠夫「陳独秀の虚像と実像——陳独秀論における実証と方法」『歴史評論』第329号、1977年9月。
- (57) 東京大学中国哲学研究室編『中国の思想家——宇野哲人博士米寿記念論集』勁草書房、1963年。
- (58) 岩村三千夫『毛沢東の思想』世界評論社、1948年、144-145頁。
- (59) 野村浩一『中国革命の思想』岩波書店、1971年、367・371頁。
- (60) 東京大学文学部中国文学研究室編『近代中国の思想と文学』大安、1967年。
- (61) 前掲東京大学百年史編集委員会編『東京大学百年史』部局史4、350-352頁。
- (62) 中国現代文学選集編集部「「中国現代文学選集」全20巻について」『Books——読書人の雑誌』第142号、1962年2月。
- (63) 日本共産党中央委員会宣伝教育文化部「中国革命文学選」編集委員会「「中国革命文学選」刊行について」羅広斌、楊益言、三好一訳『中国革命文学選1紅岩上』新日本出版社、1963年。
- (64) 相浦杲「巻頭言」『野草』第1号、1970年10月。
- (65) 山田慶児「可能性としての中国革命」山田慶児編集・解説『現代革命の思想3中国革命』筑摩書房、1970年、29頁。
- (66) 西順蔵「総説」西順蔵、島田虔次編『中国古典文学大系58清末民国初政治評論集』平凡社、1971年、486頁。
- (67) 小野信爾「総説」小野信爾、吉田富夫、狭間直樹『中国文明選15革命論集』朝日新聞社、1972年、27頁。
- (68) 竹内実「まえがき」竹内実編『ドキュメント現代史16文化大革命』平凡社、1973年、iii - iv頁。
- (69) 横山英編訳『ドキュメンタリー中国近代史』亜紀書房、1973年、ii頁。
- (70) 原典中国近代思想史の会「総序」西順蔵編『原典中国近代思想史1アヘン戦争から太平天国まで』岩波書店、1976年、v - vi頁。
- (71) 溝口雄三「「中国の近代」をみる視点(一)」『UP』第96号、1980年10月。後、溝口雄三『方法としての中国』東京大学出版会、1989年、に収録。
- (72) 溝口雄三「「中国の近代」をみる視点(二)」『UP』第97号、1980年11月。後、前掲溝口『方法としての中国』に収録。
- (73) 久保田文次「近代中国像は歪んでいるか——溝口雄三氏の洋務運動史理解に対して」歴史学会『史潮』新16号、1985年3月、など。本野英一、坂元ひろ子「1985年の歴史学界——回顧と展望(中国・近代)」『史学雑誌』第95編第5号、1986年5月、も参照。

- (74) 戸川芳郎「東大中国学会の現状について」『中国——社会と文化』第1号、1986年6月。
- (75) 代田智明「近代論の構図——「中国とヨーロッパ」をめぐる」『猫頭鷹——近代中国の思想と文学』第1号、1983年6月。
- (76) 「まえがき」丸山昇、伊藤虎丸、新村徹編『中国現代文学事典』東京堂出版、1985年、1-2頁。